カンボディア・西トップ遺跡出土の仏像と鎮壇具
西トップ遺跡第 11 次調査では仏像の頭部が発見され、それに伴って出土した土器の内部には、青銅製指輪１点・ルビー小玉１点、金小玉１点、金剥片２点、鍍銀銅製品１点が含まれていた。その内容物から鎮壇具の一種ではないかと想定される。続く第 12・13 次調査においても仏像が１体づつ発見された。
本文８頁参照（撮影：井上直夫）

紙本著色藤原鎌足像
明日香村八釣地区で毎年正月 14 日に執り行われる明神講の本尊。談山神社およびその周辺には、 現在も多くの鎌足像（多武峯曼荼羅）や講式が伝えられるとともに、地域の人々による礼拝儀礼がのこされている。このたび、本像を含む明神講関連資料を調査した。
本文 22 頁参照（撮影：中村一郎）

図版 2

萬翠荘の調査（愛媛県松山市）
萬翠荘は、鉄筋コンクリート造のフランス・ルネッサンス風建築である。旧松山藩主家の久松定謨が大正 11 年に別邸として建設した。敷地は、松山城が築かれた勝山南麓の谷部に展開し、山の斜面の高低差を活かした建物・庭園配置をとる。
本文 40 頁参照（撮影：杉本和樹）

フィジー・ナバラの伝統的集落の景観
フィジー・ビチレブ島の内陸部にあるナバラでは、ブレ（Bure）と呼ばれる伝統的な家屋形式が整然と立ち並び、周囲の自然と調和した景観を見ることができる。ブレは昼は涼しく、夜は暖かい快適な居住空間を提供するが、維持していくのが困難なので、フィジーの他の地域ではほとんどトタン屋根の建物に置き換わってしまった。
本文 14 頁参照（撮影：石村　智）

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第 163 次調査）
藤原宮造営期の遺構状況を確認するため、4 ヵ所の下層調査区を設けた。調査の結果、運河 SD1901A や斜行溝 SD10965、沼状遺構 SX10820 をはじめとする藤原宮造営にかかわる遺構が多数確認でき、従来考えられていたより複雑な造営過程の復原が可能となった。南から。
本文 82 頁参照（撮影：栗山雅夫）

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第 164 次調査）
檜隈寺講堂跡の北側にある第 1 区では、谷 SX921 の谷頭部で瓦組暗渠 SX920 を検出した。暗渠は、下に行基式丸瓦を敷き、上に平瓦をかぶせている。暗渠に用いられた瓦は 7 世紀後半の檜隈寺創建瓦だが、暗渠の据付掘方からは 10 世紀の土器が出土した。このことから、後世に檜隈寺の瓦を転用して瓦組暗渠が造られたと考えられる。写真左は SX920 検出状況。写真右は上蓋の平瓦を取り外した状況。いずれも北東から。
本文 126 頁参照（撮影：栗山雅夫）

図版 4

水落遺跡の調査（飛鳥藤原第 165 次（東区））
斉明朝の漏刻台とされる基壇建物（右上）の北側にあたる部分を発掘した。調査区南側では基壇建物の北側に位置する東西棟建物の北柱列を、調査区北西側では石敷を検出した。後者は写真左下へとつながる石神遺跡の一部である。北西から。本文 106 頁参照（撮影：栗山雅夫）

石敷（奥）と、それ以前に設置された木樋暗渠を抜取るために石敷の上から掘られた抜取溝（中央）、および石敷に先行する時期の土器埋納遺構（手前）。東から。　本文 106 頁参照（撮影：栗山雅夫）

甘樫丘東麓遺跡の調査

（飛鳥藤原第 161 次調査）

谷の入口部、尾根の裾部、丘陵上部を調査し、それぞれに７世紀の遺構が展開する様子があきらかになった。尾根中腹の緩斜面では、地山を削り出して平坦地を造り出した様子と、尾根をめぐるような７世紀の柱列 SA210 を確認した。

写真上は調査区全景（南から）。写真下は柱列 SA210（東から）。

本文 116 頁参照（撮影：井上直夫・岡田愛）

図版 6

東方官衙地区の調査

（平城第 466 次調査）

東方官衙地区における 4 度目の調査。調査区北半では東西方向の築地塀で隔てられた 3 つの区画に、それぞれ 1 棟の礎石建物（東西棟）を配置していることが判明した。写真手前から順に、礎石建物 SB19405、SB19398、SB19393 が写る。南東から。本文 152 頁参照（撮影：中村一郎）

石組溝 SD19394

調査区北端で検出した東西棟礎石建物 SB19393 の南雨落溝。未加工の安山岩・花崗岩巨礫を側石と底石に用いている。側石の天端は北側石のほうが高い。奥には SB19393 の礎石が見える。西から。

本文 154 頁参照（撮影：中村一郎）

東院地区の調査（平城第 446 次調査）
東院地区西北部の調査。6 時期の遺構変遷を確認した。調査区の中央やや南寄りに、幅約 15m（50 尺）の通路空間が存在することをあきらかにした。東院中枢部への主要な導入路であった可能性がある。東から。
本文 163 頁参照（撮影：牛嶋　茂）

井戸 SE19346
6 期の東西通路 SF19344 の北において検出した。内法寸法が 1.8m 四方の井戸枠が 3 段分残存していた。特に下段 2 段分は状態が良好で、枘差鼻栓留の仕口をもつ井籠横板組の構造、加工の技法があきらかになった。南から。
本文 167 頁参照（撮影：牛嶋　茂）